NASREDDİN HOCA FIKRALARI

トルコの愉快なおじさん

ナスレッディン・ホジャのお話

著 児島和男
絵 RINTARO

Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfı

トルコの愉快なおじさん

ナスレッディン・ホジャのお話

著 児島和男
絵 RINTARO

トルコの愉快なおじさん

ナスレッディン・ホジャのお話

◎もくじ

・まえがき……3
やってみなければわからない……6
ロバに後ろ向きに乗る……8
スープのスープのスープ……10
あかちゃんを生んだ鍋……12
食え、私の上着よ、食え……16
十匹のロバ……18
世界の中心はここじゃ！……22
クルミとカボチャ……28
自分の乗った枝を切る……32
猫と三オッカの肉……36
知っている人は知らない人に……40
・あとがき……44

まえがき

トルコという国を知っていますか？

地中海と黒海に挟まれたアナトリア半島にある国（面積は日本の二倍ぐらい）で、エーゲ海をはさんでギリシャと向き合っています。

トルコの人々は、むかし、中央アジアの北の方に住んでいて、中国などとも深い関係を持っていました。とおいとおい昔から、中国の歴史にトルコの人々のことが記されています。それに、トルコの人たちは日本人とも深い関係をもっています。何故なら、トルコの人たちが話す言葉が日本語とよく似ているからです。ちょっとむずかしく言うと、トルコ語と日本語はウラル・アルタイ系という同じ言語（言葉）のグループに属しているのです。この言葉を話す人たちには、北欧のフィンランド人とかヨーロッパのど真ん中のハンガリー人、それにコーカサス地域や中央アジアのいろいろな国々（たとえば、アゼルバイジャン、カザフスタン、キルギスなど）の人々、さらに中国のゴビ砂漠の周辺に住んでいる人たちも含まれます。お隣りの朝鮮の人たちやモンゴルの人々も同様です。ですから、言葉という角度で見ると、日本人は世界のさまざまな民族の人たちとつながっているのです。わたしたちが日常なにげなく使っている言葉の中にはトルコの人たちが使っている言葉もたくさん含まれているって、知ってますか？

トルコの人たちは日本が大好きで、親戚だと思っているぐらいです。「むかしは中央アジアの北の方で一緒に暮らしてたんだよね。そして、西の方に移っていったのがトルコ人で、東の方に行ったのが日本人なのさ」とよく言われます。うそだと思ったら、大人になったらトルコに行ってみてください。みんなからそう言われますよ。それに、先に述べたようにトルコ語は日本語とよく似ていますから、私たち日本人にはとても学びやすい言葉なのです。「日本人は外国語が苦手」なんてよくいわれますが、トルコ語に関してだけはそうではないですよ。

トルコ語を学び、トルコに行ってごらんなさい。例えば、イスタンブルという大きな町があって、そこは東洋と西洋が入りまじった不思議な感じのする町なのですが、この町には、ほとんど世界中のあらゆる場所から人々が集まってき

ます。街角に立って眺めていると、ヨーロッパやアメリカから来た人たち、アジアから来た人たち、アフリカから来た人たち、中央アジアから来た人たちなど、さまざまな国と民族の人々を見かけることができます。

トルコ共和国があるアナトリア半島という場所は、文明の交差点と言われるほど、さまざまな文化と文明を持った人々が往きかった場所で、世界の歴史の中でも最も重要な役割を演じた場所のひとつです。トルコの人々もユーラシア大陸の北の方から何千年もの歳月をかけてすこしずつ移り住んできました。そして、今から千年ぐらい前（日本の歴史で言えば平安時代の終わりの頃）に、現在のイランやイラクのあたりにセルジューク帝国という大きな国をつくり、やがてアナトリア半島に進出してオスマン帝国という国をつくりました。トルコの人たちは昔はユーラシアの北の方で遊牧で暮らしていたのに、アナトリアに進出すると、比較的短い時間の間に遊牧の暮らしを捨ててしまい、農業で暮らしを立てるようになりました。なぜ、このような暮らしの変化が起きたのかは世界史の謎だといわれています。もちろん、今でも、アナトリア半島の山岳地帯でほそぼそと遊牧の暮らしを続けている人たちもいますが、ごく少数です。それに、遊牧ではなく、一定の場所で羊の群れを連れて移動しながら暮らしている人たちは、今でもたくさんいます。例えば、夏の暑い季節になれば山の上の方の涼しい場所に移り、冬になればふもとに下りてくるというような暮らしです。トルコは大草原の国で、バスなどで旅行をしていると、たくさんの羊を連れた羊飼いの人たちを見かけることもあります。

そんなトルコという国にナスレッディン・ホジャという名前の愉快なおじさんの笑い話が語り伝えられています。ホジャという名前は先生と言う意味で使われる言葉ですが、通りすがりの年配のおじさんに道をたずねたりする時に「ホジャム」と呼びかけたりしますから、むしろ日本語の「おじさん」に近い意味と響きを持っています。トルコ語にはこのホジャと良く似た意味でつかわれるエフェンディという言葉もあって、トルコと親戚関係の国々ではホジャの代わりにエフェンディ（アペンジー、アーファンティなど）という名前を持つ主人公が活躍する笑い話も語り伝えられています。ですから、ホジャやエフェンディという名前を持つ主人公が活躍する笑い話は驚くほど広い地域に広がって語り伝えられている話です。その中でも、トルコの人々はホジャの笑い話を特に大切にして、長い間語り継いできています。

トルコの人たちがとりわけホジャ話を愛し、長い年月のあいだ語り継いできたのにはわけがあります。それは、十五世紀のはじめに、チムールという名の征服者が中央アジアから巨大な軍隊や象まで連れてアナトリアに攻め込んできて、

オスマン帝国の軍隊を打ち負かし、当時ヨーロッパの国々に広く知られていたバヤジットという名前のオスマン帝国の皇帝を捕らえ、鉄の檻に入れて、中央アジアにあるチムールの都に連れ去ったという屈辱的な思い出があったのです。チムールの軍勢はトルコのいろいろな町を破壊したり、人々を虐殺したりして、帰りがけに、ホジャが住んでいたといわれているアクシェヒルの町の近くで野営しました。そして、アクシェヒルの町の人々に無理難題を押し付けて、町の人々をふるえあがらせたのです。その時に、町の人々に慰めをあたえ救ったのがホジャだったからです。ホジャは腕っ節のつよい武将ではありません。むしろ暴力なんかを使うのは大嫌いで、ユーモアや頓知が上手な、あたまの良い、そして賢いおじさんでした。ですから、チムール大王の無理難題をいつでも頓知でかわすばかりか、たまには、力自慢のチムールをギャフンと言わせたことになっています。さすがのチムール大王もホジャだけは脅かすことができず、むしろホジャの人柄と頓知の才が気に入って、いつでもホジャを自分の近くにはべらせて、話し相手にさせたという話もつたわっています。ですから、アナトリアのトルコ人にとって、ホジャは自分たちの危機を救ってくれた英雄でもあるのです。そんな感謝と尊敬の気持ちをこめて、トルコの人々はホジャ話を語り継いできたのでしょう。

ホジャ話には、チムール大王に関係する話ばかりでなく、たとえば、日本の吉四六（きっちょむ）さん話の中にある笑い話と共通した（あるいは同じ）話もたくさん含まれています。ホジャは普段は普通の町の人として暮らしています。ホジャは近所のひとたちとおしゃべりを交わすのが大好きで、道で出会った子どもたちとも話をします。子どもたちもホジャが大好きなようです。それに、ホジャは若い頃、神学校でイスラームの経典クルアーンを学んだことがあるので、ときどきモスク（イスラームの礼拝堂）で人々にお説教をすることもあります。そのお説教がまたユーモアに富んでいて、ホジャの愉快な説教がたくさん語り伝えられています。でも決して偉そうな態度はしめさず、いつも貧乏で、暮らしをたてるのに四苦八苦しています。それでも、決してくじけず、どんなピンチに陥ってもいつも頓知で切り抜けて、明るく、悠々と生きています。

この本で紹介するのは、そうした愉快なおじさんホジャに関して後世まで語り伝えられたうわさ話、つまり笑い話です。

やってみなければわからない

ホジャがアクシェヒルの町の近くの湖の岸辺で、ヨーグルトを湖の水に入れてはかき混ぜていた。通りがかりの人がホジャの奇妙な行動をみとがめて

「なんでそんなことをなさっているんです」とホジャにたずねると

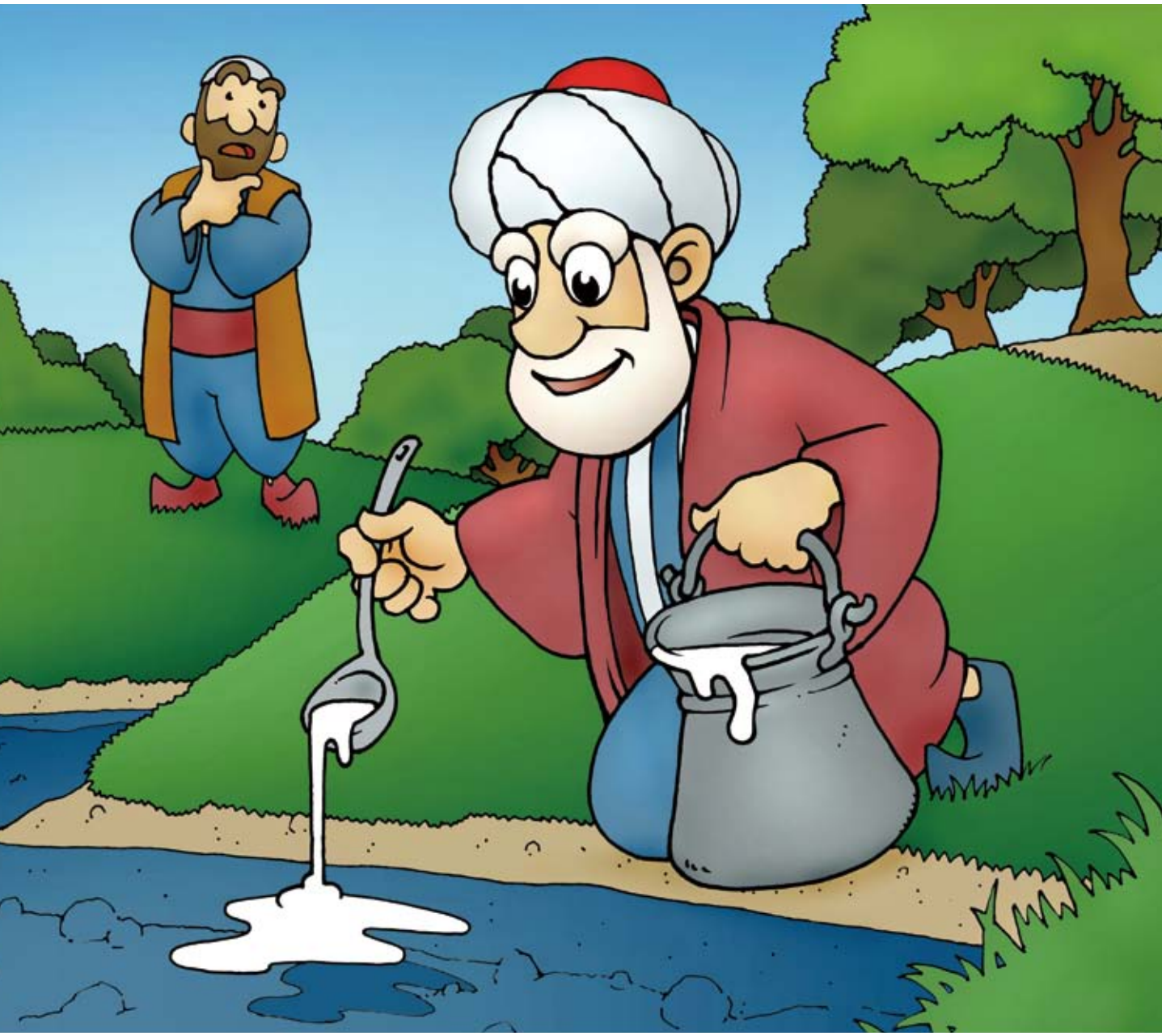
「ヨーグルトの酵母（たね）を入れとるんじゃ」

「まさか！　湖にヨーグルトの酵母（たね）を入れて、ヨーグルトができるもんですかい」

すると、ホジャは言ったんですとさ。

「そうかね。やってみなければわからんじゃないか」

＊この話の題は、トルコ語では「ヤア・トゥタルサ」と言って、一種の格言のように使われています。ホジャ話の舞台であるアクシェヒルでは毎年ホジャ祭りが開催されて、ホジャ話の研究者たちのシンポジウムなども開かれるので、大勢の人が集まります。その際には、町の近くのアクシェヒル湖の岸辺で、この話を題材にした寸劇が演じられます。なにごともやるまえに諦めてしまうより、ヤア・トゥタルサの精神でチャレンジした方がいいかもね！



ロバに後ろ向きに乗る

弟子をつれて散歩に出かけたホジャが後ろ向きでロバに乗っているので、弟子たちがいぶかると、ホジャは言ったんですとさ。

「この方が君たちと話がしやすいじゃないか」

＊とても短い話ですが、トルコではとても有名な話です。「ロバは前に向いて乗るもの」という常識からホジャは解放されています。ものごとは見方によってまったく別な風に見えるということを教えてくれているのかもしれません。「ロバは前向きで乗るもの」というのは普通の人の普通の考え。「場合によっては後ろ向きで乗った方がいいこともあるさ」というのがホジャの考え。

そして、後ろ向きでロバに乗ったホジャの姿は銅像にされて、アクシェヒルの町の広場にも立っていますし、いろいろな本の挿絵やポスターにも使われています。こんなホジャ話を愛しているトルコの人々自身もなかなか柔軟な感じ方や考え方をもっている人が多いというのが私の印象です。日本では、トルコと言うとレスリングや重量挙げの強い国というイメージが定着していますが、なかなかどうして！かれらのユーモアやジョークを好む精神に脱帽したくなるぐらいです。

スープのスープのスープ

ある日、ホジャの家に近所の男が何かの相談でやってきたので、ホジャのおかみさんがウサギのスープを出したところ、男は舌鼓をうって、さかんに「美味しい」とほめました。翌日、その男の友達と称する男がやってきたので、ホジャは残っていたスープに水を入れてうすめたのを出しました。友達と称する男はそのスープを賞味して、すこし物足りなそうな顔をしたものの、やっぱり「美味しい」と賞賛して帰りました。さらにその翌日、今度は、その友達の友達と称する男がやってきたので、前日の水で薄めたスープの残りをさらに水で薄めてふるまいました。さすがに友達の友達は首をかしげて「水っぽい」というので、ホジャも言いましたとさ。

「左様じゃ。おまえさんはわしの友達の友達の友達じゃ。だから、これはスープのスープのスープなんじゃ」

＊スープはトルコ語でチョルバと言います。日本ではスープ料理はもっぱら味噌汁ですが、トルコにはいろいろなタイプのチョルバがあって、どのスープもとても美味しいですよ。

トルコの人々はお客さんをもてなすのが大好きで、その気持ちをミサーフィル・ペルベルリックという言葉で表現しています。特に外国人をお客に招くのは大好きで、私もよく招かれました。そんなときには、家族中どころか親戚一同までやって来て、「日本はどんな国？」などと質問攻めにあいました。

あかちゃんを生んだ鍋

ある日、ホジャは隣りの家に行って、大鍋を借りて来ました。そして、二、三日してから、自分の家にあった小さな鍋をのせて、隣りの家に返しに行きました。大鍋の上に小さな鍋がのっているのを見た隣人は、けげんな顔でホジャにたずねました。

「あれ、あれ、この小鍋はいったいどうしたわけで・・・」

「それがですな。わたしがおたくの大鍋をお借りしている間に、あかちゃんを生みましてな。大鍋が生んだ小鍋となると、やっぱり私の家でいただくわけにもいきませんから。ともども返しにまいったようなわけで・・・」

ホジャがこういうと、隣人はおどろいてぽかんとしていましたが、やがて、

「ああ、そうですか。うーむ、大鍋が小鍋を生んだとねえ・・・。なるほど、ま、いただいておきましょう」

隣人はホジャから大鍋と小鍋を受け取ると、上機嫌で奥のおかみさんに言いました。

「隣りのホジャの家に貸しておいた大鍋が、あかちゃんを生んだとよ」

さて、しばらくして、ホジャはふたたび隣りの家から大鍋を借りました。ところが、こんどは一週間たっても、ひと月たっても、大鍋を返しに来ません。とうとう隣人はしびれを切らして、ホジャの家にやってきて言いました。

「お貸しした大鍋をそろそろ返していただけませんかねえ。家内もブツブツ言ってますので」

ところが、ホジャは

「それが、お気の毒に、お借りしてからしばらくして、あの大鍋が死んでしまいましてなあ。まあ、丁重におとむらいはしておきましたので、あしからず。寿命が来ていたんでしょうな」と言ったものですから、隣人は顔を真っ赤にして怒りだしました。

「こら、ホジャ。冗談も休み休み言え。鍋が死ぬなんてことがあるわけないじゃないか。いいかげんなことを言って、ひとの大鍋をまき上げようという魂胆じゃあるまいな」

ところが、ホジャはすました顔でこう言ったそうです。

「おやまあ、あなたも身勝手なことをおっしゃいますなあ。大鍋があかちゃんを生んだことは信じたくせに。鍋が死んだことは信じないのですかい」

＊この話で身勝手なのはホジャなのか隣人なのかわかりませんね。この話はユーラシア大陸ではさまざまな地域のさまざまな民族の人々によって語り継がれているようです。例えば、モンゴルの人々が語り継いでいる話の中では、隣の家の主人は高利貸しの強欲な男なので、主人公のバラガンサンが一杯食わして日ごろのうらみをはらしたことになっています。チベットの山奥なんかでもこの話が語り伝えられています。

食え、私の上着よ、食え

断食月のある日の夕方、ホジャは近所の金持ちの家から食事に招待されました。ホジャは普段着のままでその金持ちの家に出かけて行きました。ところが誰もホジャには見向きもせず、相手にもしてくれません。そこで、ホジャはすぐ家にとってかえすと、今度はお祭り用の晴れ着を着て、再びその金持ちの家に出かけていきました。立派な服を着込んでやってきたホジャを見た金持ちの家の人たちは、うやうやしい態度でホジャを家の中に招き入れ、食卓の一番良い席にホジャを案内しました。そして、次から次へと美味しいご馳走を運んできたのです。ほかのお客たちも、ホジャが食事を始めるのを待っている様子です。そこでホジャは、いきなり自分の上着のそでをご馳走が盛られている皿の方に近づけて、スプーンでご馳走をすくって上着のそでに放り込みながら、

「さあ、私の上着よ、食べろ」と言いました。

食卓についていたほかの客が驚いて、口々にホジャにたずねました。

「ホジャさん、何をなさっているんです？」

すると、ホジャはすました顔で言ったそうです。

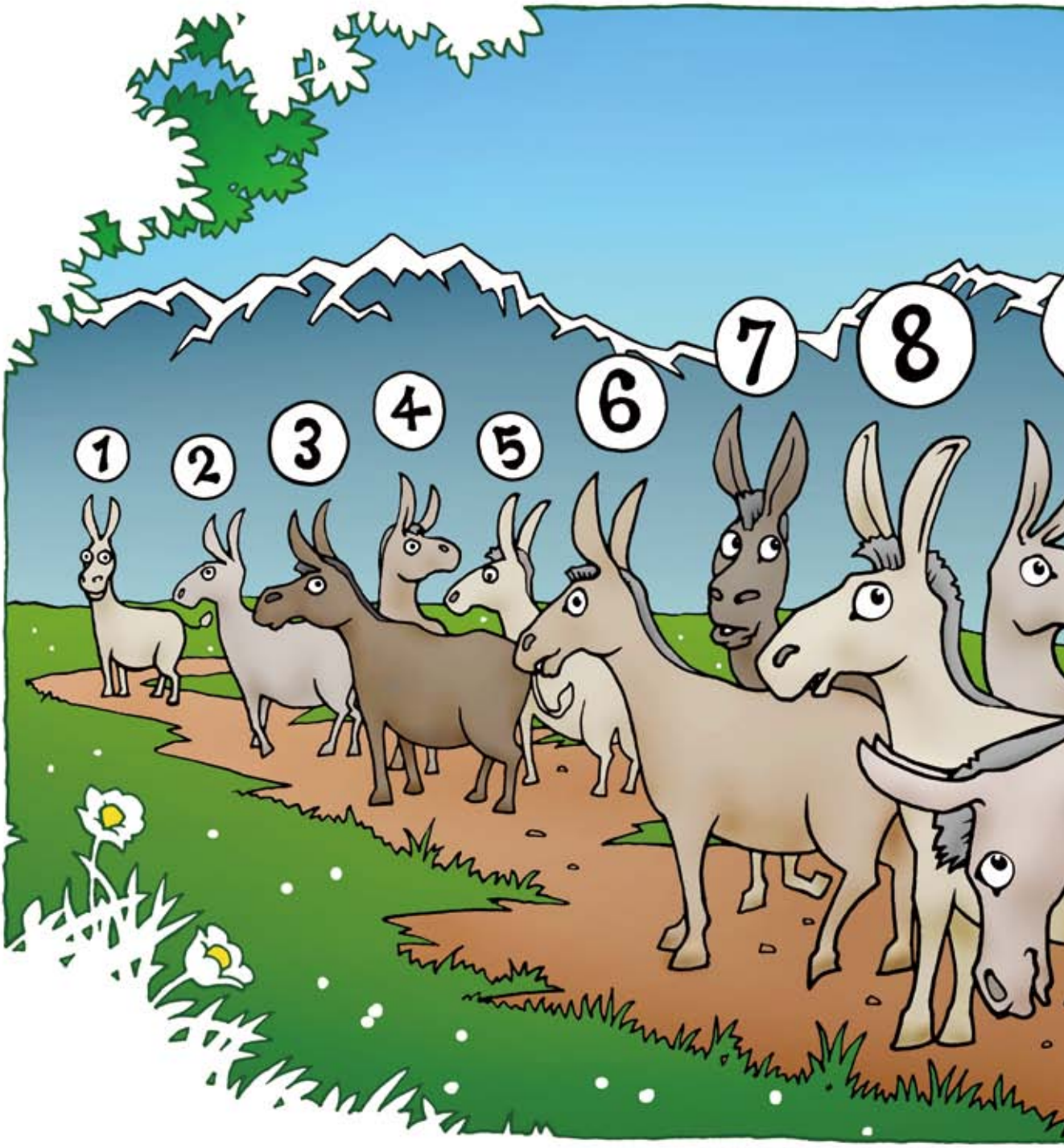
「どうやら、招待されたのはわしではなくて、上着のようですからな。食事も最初に上着に食べさせなければなりますまい」

＊奇妙な題がつけられているこの話もトルコではとても有名です。「人を見かけで判断してはいけませんよ」という皮肉ですが、むかしからこんな話が語り伝えられてきていることは、世間の人はやっぱり人を見かけで判断しがちだからかもしれません。

十匹のロバ

ある日のこと、ホジャは遠くの村の親戚の家を訪ねました。用事を足して帰る道々、くたびれてきたので、途中の粉ひき場で一休みしました。日も暮れかけて、ホジャが重い腰をあげて帰りかけると、粉ひきのおやじが言いました。

「ホジャさんや。あんたは良いお人だ。申し訳ないが、ちょいと頼まれてくれんかね。わしのところに十匹のロバがおるんじゃが、こいつらをあんたの村まで運んでくださらんか。なにわけはない。ホイホイと群れのうしろから追って行きゃ、あっ


1
2
3
4
5
6
7
8

という間に村に着いてしまいまさあ。ついでにおまえ様もロバの一匹に乗って行きなさりゃ、歩かなくて済むんだから、こんなに楽なことはない」

ホジャは喜んで引き受けました。早速、一匹のロバに乗り、他のロバたちを追いたて追い立て、村をめざして出発しました。どんどん進んで行くうちに、ホジャは、ふとロバがちゃんと十匹いるかどうか心配になりました。

「ここらへんで、ロバの数を確かめてみよう。なにしろ預かりものだから、一匹でもいなくなったら大変なことになる」

ホジャはロバに乗ったまま、自分の前に歩いているロバを数え始めた。

「一、二、三、四、・・・九。はて、一匹足りないぞ」

何度数えても九匹だ。確かに十匹預かったのに、これはいったいどうしたことか。

「ようし、今度はロバから降りて、一匹、一匹、手でさわって数えてみよう」

ホジャはロバの耳をこすったり、背中をさすったり、尻尾を引っ張ったりしながら数えてみました。今度はちゃんと十匹います。やれやれと安心して、またロバにまたがると、先へ進んで行きました。そしてしばらくしてから、ロバに乗ったまま、またロバを数えました。

「一、二、三、四、・・・九。また、九匹だ。降りてもう一度数えてみよう」

降りて数えてみると十匹います。何度も数えてみましたが、乗って数えると九匹で、降りて数えると十匹います。ホジャは首をかしげながら言った。

「おやおや、ロバは乗って数えると九匹で一匹足りなくなり、降りて数えりゃ、十匹おる。それなら、乗って九匹で行くより、歩いて十匹で行く方が安心だ。何しろ預かったのは十匹なのだからな。これで粉ひきのだんなに申し訳が立つというものだ」

村はまだまだ遠いというのに、ホジャはロバたちと一緒にてくてく歩いて行ったんですとさ。

＊この話も有名なホジャ話のひとつですが、実はこの話はトルコにも近いアラブの国々で語られているジュハーという名前の主人公が活躍する笑い話のなかにも含まれています。それも、ホジャが生まれたとされる十三世紀より五百年ぐらい前に書かれたアラブの本の中でもこの話が紹介されていますから、ホジャ話とジュハーの話は深い関係を持っていることがわかります。こんな風に、よくできた笑い話は国や民族や言葉の垣根を乗り越えて、どんどん広がって行くようです。

世界の中心はここじゃ！

ある時、三人のもの知り博士が旅にでました。行く先々で、その土地のもの知りと問答を交わしては、人々の暮らしぶりや、彼らにどの程度の知恵があるのかを調べるのが目的です。三人は国中の町や村をまわって歩いているうちに、とうとうコンヤというところにやってきました。コンヤのスルタン（王様）のところに泊めてもらった博士たちは

「さっそく、この町のもの知りと問答をしてみたいのだが、ふさわしいものはおるだろうか」と聞きました。するとまわりの者が口をそろえて、

「それならアクシェヒルに住んでいるナスレッディン・ホジャがぴったりです」と言いました。

さっそく、役人がホジャを召し出すために出かけました。宮殿の広場に用意されたテーブルにはたくさんの役人や学者たち、そのほかお偉いさんたちがずらっと並んで、どんな問答が始まるのかと固唾をのんで待ち構えていました。三人の博士たちも、真ん中のテーブルに難しい顔をして座っています。

やがて、ロバに乗ったホジャがやってきました。ホジャはまずスルタンにあいさつし、次にもの知り博士たちに

「お待たせいたしました。さあ、なんなりとたずねてください」と言いました。

三人のうちの一番偉そうな博士がエヘンと咳払いして重々しく立ち上がり、ホジャに向かって聞きました。

「それでは、始めますぞ。世界の中心はどこだとお思いですかな」

すると、ホジャは持っていた杖でロバの右側の前足で踏んでいるところを指して

「世界の中心はここですわい」と、いとも簡単に答えました。

「なんですと。世界の中心がそんなところだなどと、どうしておわかりなのです?」

一番目の博士が驚いて聞き返しました。するとホジャは

「ご信用なされないというのなら、どうぞ計ってみてください。ちょっとでも足りなかったり、余計だったりしたら、わしに言ってくだされ」と胸をはって言いました。一番目の博士は答えに困って、すごすごと引き下がりました。

一番目の博士がいともたやすく降参させられてしまったのを見て、二番目の博士がすっくと立ち上がると、一歩前に出てきてホジャを見下ろすようにしながら、

「それではこんどは私がお聞きしましょう。この大空にまたたく星の数は、どれほどでございますかな」とたずねました。こんな難しい質問には答えられないだろうとにんまりしている博士に、ホジャは今度もすぐに答えました。

「わしのロバの灰色の毛の数ほどですわい」

二番目の博士は目を丸くしてホジャに言いました。

「えっ！　なんですと。どうしてそんなことがおわかりになりますかな」

ホジャはすまして答えました。

「うそだと思うなら数えてみてごらんなさい。もしどちらかがすこしでも多すぎたら、おっしゃってください」

博士はあきれて言いました。

「ホジャさん。ロバの毛の数など、どうやって数えるんですかね」

するとホジャは

「星の数が数えられるなら、ロバの毛の数などお茶のこさいさいですよ。そうではありませんかね」と、すずしい顔で言いました。

二番目の博士も返事につまり、頭をたれてすごすごと引き下がりました。

次に、三番目の博士が進み出ました。三番目の博士はふさふさしたあご鬚をしごきながら、鋭い目つきでホジャをにらみすえて言いました。

「ホジャさん。わしの、このあご鬚は何本ありますかな」

ホジャはまた顔色ひとつ変えずに、あっさりと答えました。

「わしの、ロバの尻尾の毛の数と同じほどですな」

「なんですと！　その証拠は？　どうやって、そんなことがわかるのですかな？」

「簡単なことですわい。まずおまえ様のあご鬚を一本引っこ抜く。次にわしのロバの尻尾の毛を一本引っこ抜く。こうして一本ずつ数えていって、わしのロバの尻尾に一本も毛がなくなった時、おまえ様のあご鬚が少しでも残っていたり、その反対だったりしたら、おまえ様の勝ちということになりますわい。いかがですかな」

三番目の博士もこれにはまいってしまいました。

こうして、三人の博士たちは、ホジャの即答にすっかり脱帽したそうです。

＊この話の舞台のコンヤという町は、トルコの古い都のひとつです。ずっと昔、ルーム・セルジュックと呼ばれる帝国がこの町を都に栄えていた時期があります。ヨーロッパから十字軍などが入り込んできたとき、それと戦ったのはこの王朝です。

現在でもトルコの古い文化を示すいろいろな遺跡がありますが、特に二階部分が道路の方にせり出した独特の建築様式の建物が残っていたり、屋根が丸屋根ではなく、とんがり帽子型になっている独特のスタイルのジャーミイがあります。トルコの人の定説では、ホジャはこの町でクルアーンを学んだことになっています。

「世界の中心はここじゃ！」というホジャの言葉はトルコの人たちのお気に入りらしく、いろいろな場面で引用されます。ホジャが生まれたとされるシビリヒサールの町の入口にもロバにまたがったホジャの巨大な銅像があって、その台座にこのセリフが刻み込まれています。

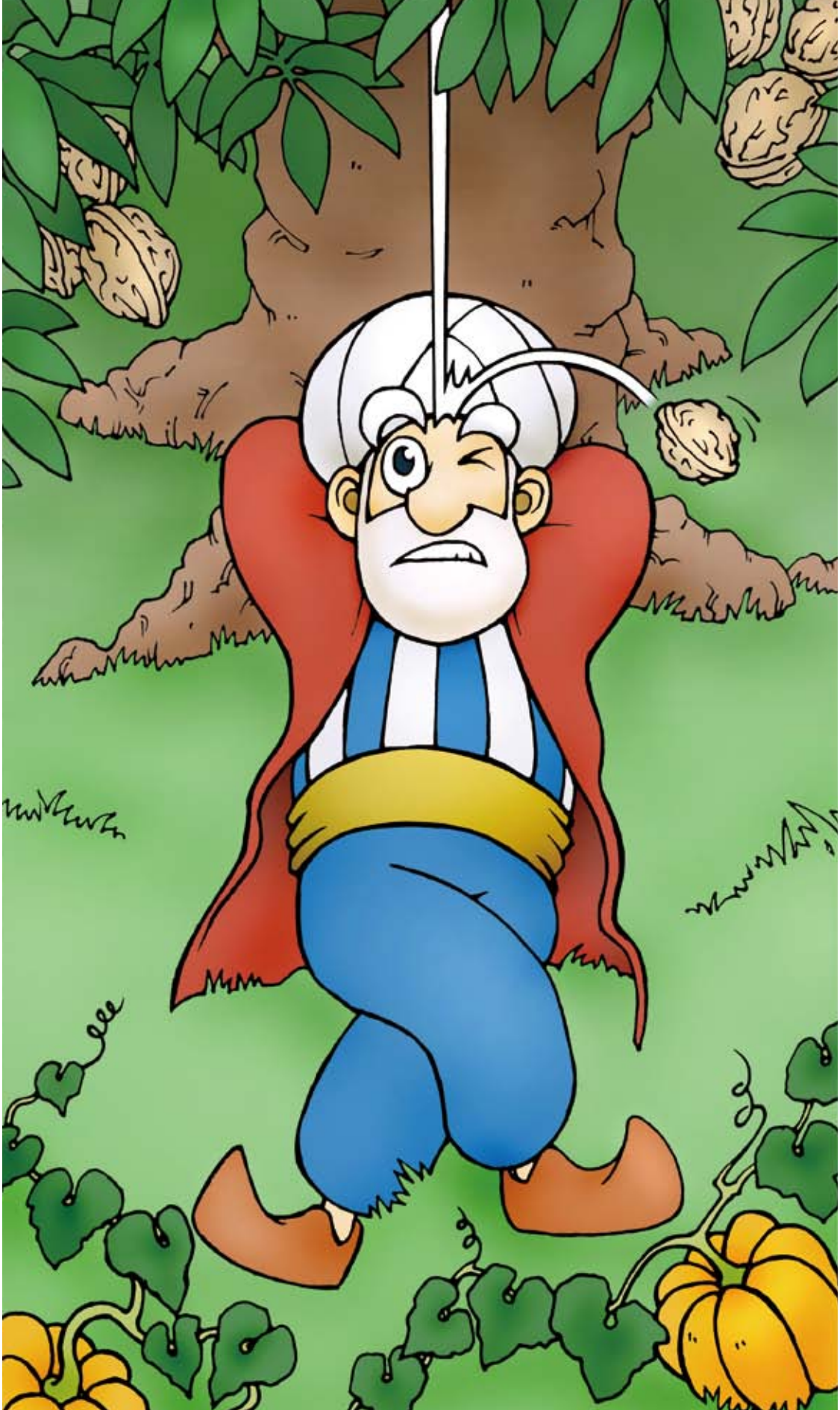
クルミとカボチャ

夏の真っ盛りのある日、ホジャはロバに乗って村へ出かけました。しばらく行くうちに、暑さのために汗はだらだら、のどはからから、ホジャはすっかり疲れてしまいました。お日様はかんかん照り、村はまだ遠く、すこし休みたいと思ってあたりを見回すと、近くに大きなクルミの木があるのに気がつきました。

「よし、よし、あの木陰ですこし涼んでいくことにしよう」

ホジャはさっそく木の枝にロバをつなぎました。それからあたりを見回して、誰もいないのを確かめると、汗びっしょりになったターバンを脱ぎ、胸もはだけて風を入れ、汗をぬぐいました。そして草地に長々と体を横たえ、いい気持ちになって、見るともなくぼんやりと前の畑に目をやると、ひとかかえもあるような大きなカボチャがなっているのに気がつきました。

「ひゃあ、なんとでっかいカボチャだろう。十人家族で腹いっぱい食べたって、あれじゃ食べきれんわい」と、独り言を言いながらふと上を見上げると、大きなクルミの木の枝に、小さなクルミがたくさんなっているのが見えました。



「なんとまあ、神様。あなたは全能のお方ではありませんか。どうしてあんな細っこい茎にどでかいカボチャを実らせて、枝が天を覆い隠すほど大きな木に、こんなにちいちゃな実をつけさせたりなさるんですか。大きなカボチャはこのクルミの木のように大きな木に、そして、ちいちゃなクルミの実は細い茎になるのがふさわしいのじゃありませんかね」

と、考えたちょうどその時、ホジャの頭の上にカツーンとクルミの実が落ちて、目の玉から火花が飛び散ちりました。

「痛っ！」

ホジャはとっさに、両手でつるつるの頭をおさえました。そして、心臓が張り裂けそうなぐらい驚いて、ホジャはたったいま考えていたことを悔やみました。そしてすぐ、両手を天にひろげて言いました。

「ああ神様、お許しください。金輪際あなた様の御業に口をはさむことはいたしません。あなた様がなさることは、いちいちごもっともでございます。もしも、クルミじゃなくてあの大きなカボチャの実がわたしの頭に落っこちていたら、私は今頃どうなっていたでございましょう」

＊ホジャは敬虔なイスラーム教徒（ムスリム）ですから、クルミの実が落ちてきたのはアッラー（神）の御業に疑いをもった自分に対する神の戒めと受け取ったのでしょう。ムスリムの人々は世の中の森羅万象、ありとあらゆる出来事の背後にアッラーの意思が働いていると信じて、アッラーに対する感謝の心を忘れません。

でもムスリムの人たちは力ずくで自分たちの信仰をほかの宗教を信じている人たちに押し付けることはしません。この話にしたって、ホジャの言動をおだやかなユーモアにつつんで笑い話として語り伝えているのです。「なんでもかんでも神様のおかげとしてありがたがるのもちょっとどうか・・・」という覚めた眼もトルコの人々は持っているのです。眼をつりあげて自分の言い分だけを言い立てる態度は人間らしくないという認識と広々とした心をトルコの人々は持っています。ユーモアとかほんとうに人の気持ちを明るくしてくれる笑いは、そうしたひろびろとした心の中から生まれてくるのではないでしょうか？

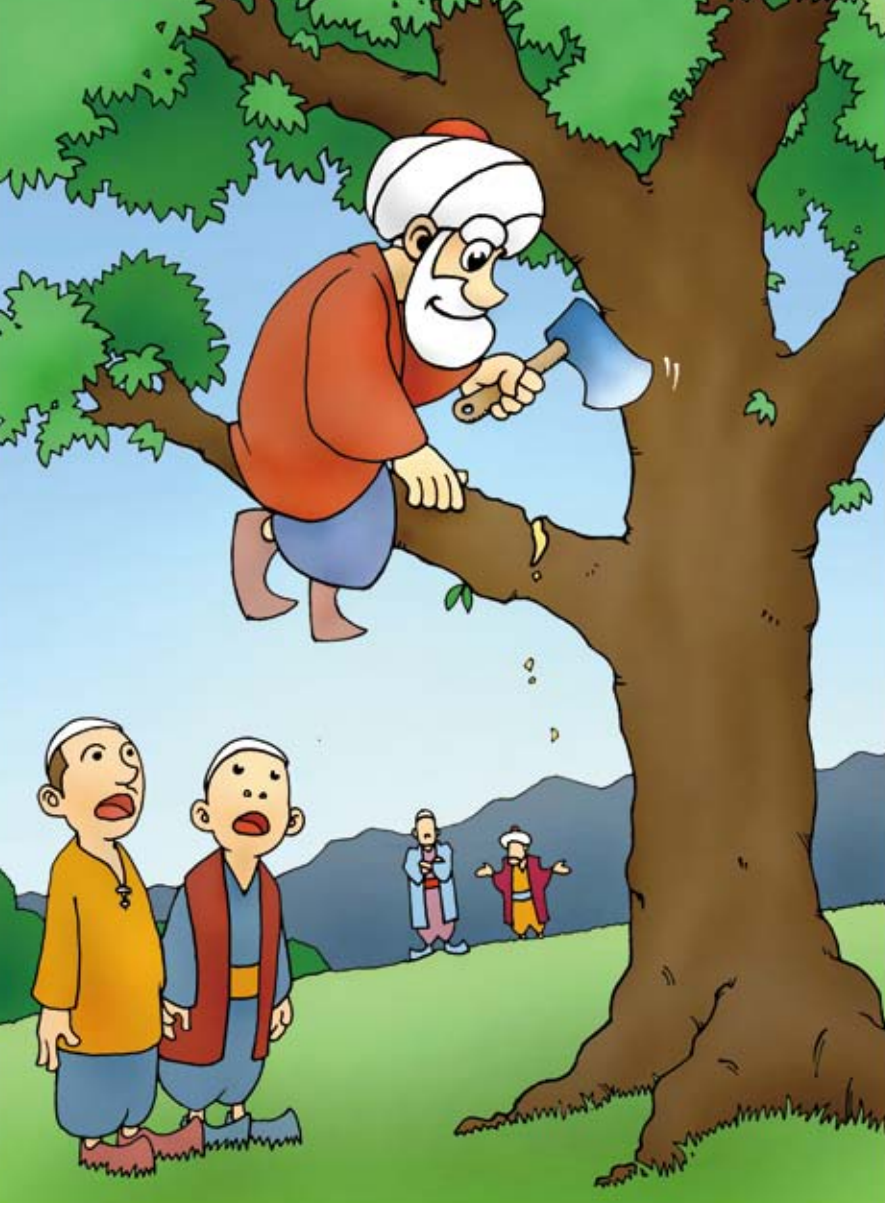
自分の乗った枝を切る

ある日のこと、ホジャは木を切りに森へでかけて行きました。寒い冬が来る前にたき木をたくさん用意しなければならないからです。毎年のことなので、ロバも今日の働きは楽ではないことを知っているのか、ホジャの後からしぶしぶついて行きました。森に着くと、ロバを近くの木につないでから、ホジャは手ごろな木を選んでよじ登りました。そして、太い枝にまたがって、切り始めました。カーン、カーンと、斧を振り下ろす音が森中に響きわたりました。汗みずくになって斧をふるっていると、そこを通りがかった男がホジャを見て、驚いて言いました。

「あれまあ、あんたさんは何をやっていなさるんだね。自分の乗っている枝を切っちまったら、枝ごと落ちて、死んじまうだろうにさ」

ホジャは男の言うことには耳を貸さず、あいかわらずカーン、カーンと枝を切り続けました。男は、言うことを聞かないで枝を切り続けているホジャを振り返り振り返り、すこしはなれた木の下に行って、どうなることかと心配そうに見ていました。

しばらくすると、思ったとおり、バリバリッという物凄い音をたてて枝が折れ、



そのとたん、ホジャもドッスーンと地面に落ちてしまいました。

「うーん、痛たたあ」と、しかめっつらをしながらホジャは足腰をさすりさすりやっと立ち上がると、さっきの男のところに行きました。

「いやいや、おまえさんはすごいお方だ。わしが枝から落ちることをちゃんと知っていなさった。そんな風にこれから起きることをご存知ならば、わしの死ぬ時も知っていなさるはず。さあさあ、教えてください。わしはいったい、いつ死ぬのかね」

男は困ってしまいましたが、自分の襟首をつかんで離さない

ホジャから逃げ出すこともできず、なんとかごまかそうと口からでまかせを言いました。

「ロバにたき木を背負わせて坂道を上る時、ロバが一度おならをしたらあんたさんの命の半分はなくなりまさあ。ロバがもし二度おならをしたら、その時、あんたさんの命はすっかりなくなってしまうと思いなされ」

ホジャは真剣にこれを聞いていましたが、やがて男によくよくお礼を言うと、切り落とした枝をロバの背に積み、坂を上って家に向かいました。するとまもなく、男の言った通り、ロバは重い荷を背中に積んだので、ふんばった拍子にブッと一発やりました。これを聞くと

「すわっ！　これでわしは死の門に近づいちまった」と、あわてふためきました。

こんなホジャの気持も知らず、ロバはすぐに勢いよく二発目をブッーとやりました。気も動転したホジャは

「ああ、これでもうおしまいだあ。わしは死んじまった」と叫ぶなり、ばったり地面に倒れてしまいました。

しばらくして、そこへ村人たちがやって来ました。そして、真っ青な顔をして横

たわっているホジャを見つけると、村人の一人が驚いて言いました。

「おや、これは大変だ。人が死んでいる。早く村に行って棺を持ってこなくちゃあ」

わいわいがやがや大騒ぎになり、村人は手分けをしてそれぞれホジャの体を洗うもの、棺を運んでくるものなど、あれこれ走り回って、あっという間にホジャは棺に入れられ、お墓に埋められることになりました。

棺を担いだ村人たちはホジャの死を悼み、悲しみながら静かに墓場へと歩いて行きました。森を抜け、川を越えて村にさしかかると、どろどろした沼地にやってきました。やっとの思いでそこを通り抜けると、今度は道が二つにわかれているところにやってきました。村人たちは口々に

「こっちの道が近道だ」、「いやあっちの道だ」と言い合ってなかなか決まりません。すったもんだしていると、棺の中でこれを聞いていたホジャは思わず棺から頭をだして言いました。

「わしが生きていた時はこっちの道から行ったものだがのう。だが死んでしまった今となっては、どちらでもあまり変わりはないわい。おまえさんらのいいようにしてくれ」

猫と三オッカの肉

ホジャはある朝、肉屋によって三オッカ（昔のトルコの重さの単位）ほどの肉を買い、おかみさんのところへ持って行って言いました。

「晩ご飯には肉料理を作ってくれ」

おかみさんの肉料理は、近所のおかみさんたちのあいだでも一目おかれているほどたいした腕前でしたから、ホジャは美味しい晩ご飯を心に描きながらうきうき仕事に出かけて行きました。ところが、ホジャが出かけるとすぐ、近所のおかみさん連中がどやどや押しかけてきました。さんざんしゃべりまくった後、彼女らのやることといえば、食べること。おかみさんはさっそくホジャが買って来た肉でたいそうなご馳走を作って、みんなにふるまいました。

さて、夕方になって、ホジャは足取りも軽く家に帰ってきました。

「野菜と肉の煮込みだろうか、それとも、肉の串焼きか、それとも、あの肉をひき肉にして肉団子を作っているかな」

美味しい料理を想像すると、ひとりでに口からよだれがたれてきました。ところ

3

がホジャが家に入ると、ほかほかした肉料理の匂いすらありません。
「たぶんわしの帰る時間がわからなくて、昼間のうちに作っておいて、わしが帰ってきたらすぐ温めよう、と思っているんだろう。ふん、なかなかよくできたかみさんだ」
と、心のうちで思いながら、ホジャは大きな声で台所のおかみさんに声をかけました。
「おーい。今、帰ったぞ。腹ペコだ。はやく食事にしてくれ」
おかみさんはホジャの声を聞くと、すぐ、水と粗末なブルグル・ピラフ（小麦をつぶしておかゆ状にしたもの）とをお盆の上にのせて持ってきました。ホジャはピラフの中をのぞきました。肉は見当たりません。かき混ぜてさがしても、一切れの肉もありませんでした。
「おい、こりゃなんじゃ。今朝おまえに渡した肉はどうしたんだね。忙しくてピラフの中に入れるのを忘れっちまったのかい」
ホジャは半分がっかりし、半分怒っておかみさんに言いました。すると、おかみさんは何食わぬ顔で言いました。

「それがね、おまえさん。仕事が山ほどあってさあ、一日中とても忙しかったのよ。そしたら、このくいしんぼう猫め、あたしが台所にいないすきに、こっそり台所に入って、一切れも残さずみんな肉を食っちまったのさ」

ホジャはおかみさんの言うことを黙って聞いていましたが、やおら立ち上がると、さお計りを持ってきて、暖炉のそばでまるまって寝ている猫を計りにかけました。見ると、猫の重さは三オッカです。ホジャはおかみさんに言いました。

「やいっ、わしが今計ってるのが肉なら、猫めはどこかね？　もしこれが猫だったら、肉はどこへいっちまったんだ？」

＊トルコのおかみさんたちはおしゃべりが大好きで、それぞれの家に集まっては四方山話の花を咲かせます。こうしたことをトルコ語ではデデコドゥといいます。私のおかみさんもトルコではいろいろなところでおかみさんたちのデデコドゥに加わったそうです。そして、そこでたくさん笑い話を聞かせてもらったそうです。

知っている人は知らない人に

ホジャのおつとめのひとつにジャーミイ（イスラームの礼拝堂）での説教があります。毎週金曜日に身を清めて礼拝堂にあつまる人々にアッラーの偉大さや、ひたすら神をあがめ讃えることの大事さを説かねばならないのですが、ホジャの説教はひどく風変わりで、まじめな話なのか、深い哲理を語っているのか、よく耳を澄まして聞いてみないとわかりません。

ある金曜日、ホジャは説教壇にのぼって、人々にこう言いました。

「みなの衆、わしがこれからどんな話をしようとしているかおわかりかな？」

人々は口をそろえて答えました。

「わかりません」

「なに、わからない？　わからない人たちには何を話しても無駄というものだ」
ホジャはこう言うと、ゆっくり説教壇を降り、礼拝堂から出て行ってしまいました。
次の金曜日、ホジャは再び説教壇にのぼると、人々にまたしても同じ質問をしました。
「みなの衆、わしがこれからどんな話をしようとしているかおわかりかな？」
人々はすぐ答えました。
「わかります」
この前『わかりません』と答えてホジャに逃げられたからです。
「なに、おわかりとな？　それなら私が話すまでもない。みなさんわかっていらっしゃるなら、わざわざ話すのは無意味というものだ」
ホジャはこう言うと、説教壇を降り、またしても、礼拝堂から出て行ってしまいました。
さて、その次の金曜日、人々はホジャがやってくる前にしっかり相談しあいました。ある人たちが『わからない』と答え、残りの人たちが『わかる』と答えれば、さすがのホジャも今度こそは立ち往生するだろうというわけです。そこにやってき

たホジャは、説教壇にのぼって、今度も同じ質問をしました。

「ああ、みなの衆、わしがこれからどんな話をしようとしているかおわかりかな？」

そこである人たちは手はずどおり「わかりません」と答え、残りの人々は「わかります」と答えました。

「ふむ、大変結構。それではわかっている人たちはわからない人たちに教えてやることですな」

ホジャはこう言うと、説教壇を降り、ゆうゆうと礼拝堂から出て行ってしまいました。

＊トルコの人たちはイスラームという宗教を信じています。七世紀の初めのころにアラビア半島のメッカという町に住んでいたムハンマドという人が神から啓示を受けた宗教で、百年もたたないうちにアラビア半島全域にひろまり、やがて、西は北アフリカ一帯から、現在スペインやポルトガルというヨーロッパの国々があるイベリア半島の一部にまでひろがりました。また、東は中近東（現在のイラクやイランのあるあたり）から中央アジア全域にひろがり、さらにインドの一部やインドネシアなどにもひろがりました。現在では世界中で十五億人を超える人々が心のよりどころにしている宗教です。日本にもイスラームの国々からたくさんの人たちがやって来て住み着くようになっています。

あとがき

どうでしたか？　読んでみておもしろかったですか？

トルコでは大人もこどももみんなホジャのことを知っていて、家族で食事をしている時でも、学校でも、公園や野原で友達たちと遊んでいる時でも、よくホジャのことを話題にして、愉快な話を語り合って笑っています。トルコの人たちは笑い話やユーモアが大好きで、おまけに日本も大好きな人たちなのですよ。トルコには、ずっとむかしロシアの大艦隊を打ち破った東郷元帥の名前をつけた通りまであるって、知ってますか？　それに、日本とトルコの間では忘れられない出来事もあります。それは一八九〇年に起きたエルトゥールル号の遭難事件で、当時日本にやって来ていたオスマン帝国海軍の軍艦エルトゥールル号が嵐に襲われて和歌山県の串本町の沖合いで難破してしまったのです。このとき、串本の町の人々は悪天候をおかしてトルコの船員たちの救助に全力を尽くしました。残念ながら、荒れた海にのみこまれて五百八十七名の船員がなくなりましたが、六十九名の船員を救助することができました。救助されたトルコの船員たちは日本の軍艦でトルコまで送り返されたのですが、このときのことをトルコの人々はいまでもしっかり記憶していて、日本とトルコの友好のきずなを大切にしています。このトルコの船員とトルコのイスタンブルまで送ってあげた日本の軍艦には、『坂の上の雲』で有名な秋山真之も乗っていました。明治二十年代のことですが、当時の日本人は案外広々とした考えをもち、国際的な舞台でたくましく活躍していたのですね。

ホジャの笑い話の舞台になっているアクシェヒルはトルコの南西部にあって、イスタンブルとかアンカラにくらべると日本ではあまり知られていませんが、トルコの古い町のひとつです。現在のトルコは、広々とした大草原と、ところどころにはげ山が続いている国で、日本とはまるで違った風景の国ですが、アクシェヒルの近くの山々は日本の山とおなじように緑に覆われており、郊外にはオリーブ畑やブドウ畑が広がっていて、緑豊かなところです。そして、アナトリア半島を東西に貫く街道と南北に走る街道の交差点のちかくにあるので、昔からトルコの歴史では重要な役割を果たしてきた町です。ホジャはこの町に十三世紀（千二百年代、日本へのモンゴルの来襲があった頃）に住んでいた実在の

人だという説もありますが、ほんとうのことはわかりません。ホジャ話にも出てくるチムール大王がアナトリア半島に攻め込んできたのは十五世紀（千四百年代、日本の歴史で言えば足利義満の時代で、金閣寺・銀閣寺が建てられた頃）の初めのことですから、時代があいませんよね。たぶん、十三世紀のころにホジャみたいなとても頭が良くて愉快なおじさんが住んでいて、その人の記憶が後の時代に起きたチムール大王の来襲で苦しんだトルコの人々の思い出とむすびついて、さまざまなホジャ話がつくられたのかもしれません。そのホジャ話が何百年もトルコの人々に語り継がれて、現在もトルコの人々にも語られているのです。つまり、ホジャは現代のトルコ人の心のなかにしっかり生きていると言えます。

現代までホジャ話として語り伝えられている話が全部で何話あるにかはわかりません。何回もトルコに出かけて町の本屋さんで売られている漫画や絵本、子供向けの本、そして大人の人たちのために出版されたホジャ話の本を百種類以上集めてみましたが、おそらく四百話か五百話はあるのではないかと思います。そのなかには大人にならないと分からないような話もたくさんあるので、この本で紹介したホジャ話はほんの一部に過ぎません。まだまだ面白い話がたくさんありますから、みなさんも大人になったらトルコ語を勉強して、もっと多くのホジャ話を知ってほしいと思います。

現代のトルコの人々は、そのホジャ話が一番好きだと思いますか？このことについては、児島満子というホジャ話の研究者がトルコ中を旅行して、たくさんのトルコの人たちから聞き取り調査した報告があります。『ホジャは今でも生きている』と題されたこの報告は、今から十五年ほど前にちいさな雑誌で発表されたものですが、ホジャ話がトルコの人々にとってどのような意味をもっているか、そしてホジャが現在のトルコの人々の心の中どのように生きているかをはっきりと伝えていますので、ここに全文を紹介してみます。

「トルコの笑い話の主人公ナスレッディン・ホジャにひかれて初めてトルコに行ったのは一九八七年五月のことでした。あれからホジャを追い求めて五年の歳月が流れました。その間、三度トルコに行き、この国でホジャが人々の間でどのように語られ、人々はホジャをどんなふうに思っているのかを知るためにたくさんのチャンスに恵まれました。というより、そういうチャンスを自分でつくっていったと言ったほうが適当かもしれません。特に、一九九〇年六月から

一九九一年五月にわたって、十六の質問を用意して、たくさんの人々と面接をしながらホジャについて話しあったことは大変有意義なことでした。初めての試みだったので、質問の内容に不備なところがあったり、時と場所、質問の仕方などによって、同じ質問でもかなり違った答えが返ってきたりして、科学的データを出すというようなわけにはいきません。しかし、約十六の都市、三百三十九名の人々に、ノートを持って、おしゃべりをしながら聞き歩いた結果は、それなりに実りのあるものでした。

公園でくつろいでいる人々、食堂で働いているお兄さんやおじさん、旅行中にバスや船で乗り合わせた人々、ホテルの従業員、町の通りで商いをしている人々、靴磨きのおじさんや少年たち、訪ねていった高等学校の生徒たち、警備のおまわりさん、大学のキャンパスの学生たち、食事に招待してくれた家で・・・老若男女、職業もさまざまなこれらの人々に無差別に質問しました。ほとんどの人がホジャの話をすると快く答えてくれましたが、どちらかというと、若者、子供たち、特に女性より男性の方が積極的でした。

ホジャを聖人と考えているある中年の男性は、ひとつひとつの質問にまるで祈るように大変慎重に答えてくれましたし、子供たちは先を争ってホジャ話をしてくれました。高等学校の生徒たちは試験に答える時のように教頭先生の顔をうかがいながら答えましたから、本当の答えかどうかわかりません。頭にスカーフをかぶった年配の女性は何も答えてくれませんでした。この種の女性はひどく控えめで、すぐ逃げていってしまいます。アイスクリーム屋でのアンケートでは、アイスクリームをなめなめ、べとべとになりながらの質疑応答でしたが、最後にアイスクリーム代はただになりました。イスタンブルの靴磨きの子供たちはお金にならないことを知ると、答えを半分残して行ってしまいました。学者である友人たちのなかには、知識の有無を調べられるのはごめんと、答えてくれない人もありました。（中略）

こうして、たずねたずね歩いて私が受けた最も大きな印象は、ホジャがトルコの人々の間でいかに偉大な存在であるかということでした。どんなに無学であるような人でもホジャを賛美しない人はいなかったということからも、それがよくわかります。小さい時から大人に聞かされたりテレビや本で見たりしたホジャはいつごろからホジャを知ったか記憶のないほど人々の生活の中に溶けこんでおり、ホジャ話からの格言を教訓としたり、会話の潤滑油にしたりして、子供も大人もホジャ話に親しみ、好んで語りあっているのです。

大部分の人たちは、トルコの学者の間で定説になっているように、ホジャがトルコのシビリヒサールという町の近くのホルト村で生まれ、アクシェヒルで活躍し、そこで亡くなった実在の人物（一二〇八―一二八四）であると考えているようですが、チムール（一三三六―一四〇五、一四〇二年にアンカラの戦いでトルコと関係がある）とホジャとの話があることから、時代のずれを考えてとまどう人もありました。あるホジャの研究家はホジャ話のチムールはチムールではなく、残酷な権力者のシンボルとして語られているのだと話していました。結局のところ、ホジャは歴史上の人物でありながら、後世の人たちが自分たちの願いや理想をホジャに託してホジャ話として語り伝えたとすることに、異議を唱える人はあまりありませんでした。

私は本で読んだホジャ話はたくさん知っていましたが、どうしても、人々の口から直接生の声で聞きたくて、ことごとにホジャ話をせがみました。たくさん知っているという人でもなかなか思い出せなかったり、知らないといっている人でもヒントを出すと、いもずる式に話がでてきて終わるのに苦労するということもありました。特に子供、学者、若者、インテリの人たちがたくさん話してくれました。こうした話の中で、トルコの人たちに一番人気のあるホジャ話は『あかちゃんを産んだ鍋』でした。この話はホジャ話の他に、トルコの近隣諸国にもそっくりのものがあるので、他からトルコに紛れ込んできたものか、トルコから出て行ったものかどちらかでしょう。

まったく知らない人に突然近づいて、実は・・・と切り出して話し込むのは大変勇気のいることでしたが、我が偉大なるホジャは私に力を与え、答えてくれる人の心をなごませ、どんなところでも、どんな人とも楽しいひとときを与えてくれました。

私が出会い話しあった人たちの意見がトルコ民衆の考えを代表するものであると断定することはできないにしても、少なくとも、私と話したすべての人がホジャを知っていて、ホジャに関する私の調査に心から協力し、ホジャの話をすることを楽しんでいたということは事実です。

記録した人数は三百三十九人ですが、機会さえあれば絶えずホジャの話をしていたのですから、実際にはもっとたくさんの人から情報を得たことになります。

トルコの笑い話の主人公ナスレッディン・ホジャはトルコの一地方で十三世紀の初めに生まれて十三世紀の末に亡く

なったのではなく、その時から、いまや世界のホジャとして有名になり、今もなおロバに乗って、トコトコ世界中に向かって歩いているのだと私は考えています。」

どうですか？　このレポートに描き出されているように、ホジャが今もなおトルコの人々の心の中で生き生きと活躍していることがわかりますね。そして、トルコで一番人気のあるホジャ話のひとつは、この本にも紹介した「あかちゃんを生んだ鍋」です。ホジャ話のことを調べていて、もうひとつだけとても不思議に感じることがあります。先のレポートでもちょっと触れられていますが、「あかちゃんを生んだ鍋」はトルコの近隣諸国だけでなく、ロシアの南の方のコーカサスと呼ばれる地域の国々や中央アジアの国々、そして中国のゴビ砂漠のある地域に居住しているウイグル民族の人々、さらにはチベットやモンゴルの人たちも語っているのです。そして、中国でもホジャはアーファンティ（阿凡提）と名前を変えて、中国人の人々の心の中に棲みついています。「あかちゃんを生んだ鍋」だけではなく、トルコ国内で語られている多くの話がこれらの地域でも広く語り伝えられているのです。これは何を意味しているのでしょうか？　そして、もっと不思議なのは、実は日本の人たちもずっと昔からホジャ話の中に含まれているのと同じ話を語り継いできているのです。

たとえばホジャ話と吉四六話を詳しく調べてみると、両方の笑い話に同じ話がたくさん含まれていることに気がつきます。吉四六さんといえば、九州の豊後とよばれた地方（現在の大分県）の山奥の村で語り継がれていた話です。ずっと昔に、トルコの人がやってきて村の人たちにホジャ話を語ってきかせたわけでもないのに、どうしてトルコの人々と日本の人々は同じ話を共有し、同じようなことを可笑しいと感じて笑っているのでしょうか？　このことを追求していくと、笑い話とか昔話の背景にとても深い謎と興味深い文化的な問題が潜んでいることに気がつきます。ここではそのことは詳しくはのべませんが、ホジャ話を手がかりにしてそんな問題にも関心を持っていただければ、「ふむふむ、日本の子供たちも大したもんじゃわい」とホジャがニコニコ笑ってくれると思いますよ。

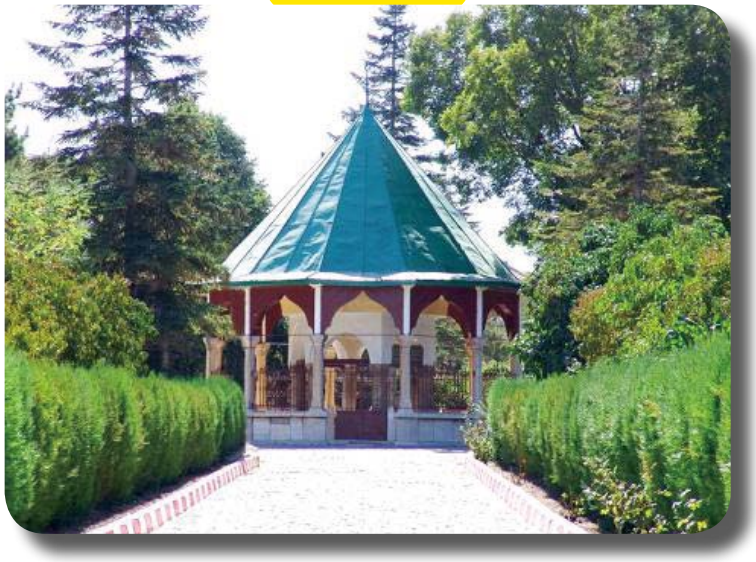
最後に、この本の出版にご協力いただいた東京ジャーミイやトルコ大使館、さらにはトルコ政府の方々に感謝します。この本が、日本の子供や一般の人々のトルコへの関心と理解を深め、日本とトルコの友好促進の一助となれば望外の喜

びです。

トルコ文化研究所代表　児島和男（ペンネーム：ほじゃ）

トルコで毎年行われている ナスレッディン・ホジャのお祭り

コンヤ郊外のアクシェヒルに建つ
ナスレッディン・ホジャの廟



毎年7月の上旬、アクシェヒルで行われる
ナスレッディン・ホジャのお祭り

ナスレッディン・ホジャのお祭りに参加するために
アクシェヒルの駅に着いた人々

お祭りで華やかな民族衣装を身につけて踊る人々

翻訳者プロフィール

児島　和男（こじま　かずお）

１９４１年生まれ
早稲田大学文学部卒業
１９８７年以後、妻（アンカラ大学大学院民族学修士課程卒業）と共に、トルコの民話の採集と翻訳・紹介に従事。１９９２年にトルコ文化研究所を設立するとともに、トルコの民話を紹介するための雑誌『ふっくら』を創刊。２００６年までの14年間通算59号まで発行。
この間、日本各地でトルコ及びトルコの文化について講演。トルコの民話に関する著書・雑誌記事など多数。現在も『おはなしギャラリー』のオーナーとしてホジャ話を含むトルコの民話の紹介に取り組んでいる。

トルコの愉快なおじさん
ナスレッディン・ホジャのお話

二〇一三年五月五日　第二版発行

著　児島　和男
絵　ＲＩＮＴＡＲＯ
表紙・本文デザイン　百瀬デザイン事務所

発行者　宗教法人
東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ
Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfı
©2011
〒一五一―〇〇六五
東京都渋谷区大山町一―十九
電話（〇三）五七九〇―〇七六〇
ＦＡＸ（〇三）五七九〇―七八二二
http://tokyocamii.org
info@tokyocamii.org

◎この本の内容

やってみなければわからない

ロバに後ろ向きに乗る

スープのスープのスープ

あかちゃんを生んだ鍋

食え、私の上着よ、食え

十匹のロバ

世界の中心はここじゃ！

クルミとカボチャ

自分の乗った枝を切る

猫と三オッカの肉

知っている人は知らない人に

この本は東京ジャーミイ・トルコ文化センターからのプレゼントです。
Tokyo Camii'nin hediyesidir.

宗教法人
東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ
Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfı

〒151-0065 東京都渋谷区大山町1-19
電話(03)5790-0760　FAX(03)5790-7822
http://tokyocamii.org　info@tokyocamii.org

東京ジャーミイ・トルコ文化センターは朝10時から夕方6時まで、
一般の見学者の皆様に開かれております。